

verrucosa Bl. (スマトラ), *G. grandilabris* Carr. (ボルネオ) *G. papuana* Schltr. (ニューギニア) などである。他のものは標本が不完全で果実の状態は不明である。牧野博士の *G. shikokiana* は周知のように *Hetaeria shikokiana* (Makino) Tuyama で、*Hetaeria* 中の数少ない腐生種である。*Gastrodia* で B 群のものはまだ、台湾、フィリピンで発見されていないが、不完全な標本を見たことがあるから、将来の報告を待ちたい。上記の英文にはここに述べた属内の分布論を除き、*G. gracilis* Bl. の研究史、最も正確と信ずる記相文、および今回発見された現場の生態環境の概略について述べた。

追記：本原稿をまとめた後に、杉野が採集したのと同じ場所で 1962 年にこの植物を採集した人があることが判った。その時の標本は果実のあるもので *Lecanorchis* sp. ムヨウラン属の 1 種とされていたようである。各地でもこのような誤認も一因となって、*Gastrodia gracilis* の発見がおくれているのではないかと想像する。

□Spore, K. R: **The morphology of Gymnosperms:** The structure and evolution of primitive seed-plants. Hutchinson University Library, London pp. 216 (1965). 15s ¥900. 著者はかつて、シダ植物の類以の好著があり、そこに盛られたさびきびした整頓と紹介が本書でも骨子となっている。はじめに短かい総論を述べ、ついで Engler の Syllabus (1954) 上巻の分類の順に従って各群を説明する。多くのデータがよく消化されて記述されており、文献もかなり最近のものまでひろってあってよい参考書である。行文もやさしく読んで面白いのは、著者の腕前というものだろう。終りに Syllabus に従ったとはいうものの、著者の見解で改変がされているから、そのシステムを抄出しておこう。

裸子植物（これは自然群ではないとする）。

A. Cycadopsida ソテツ綱 1. Pteridospermales. Caytoniales をつづして加え 7 科とする。Plumstead の *Glusiopteris* 顕花植物起源説は時機尚早という。Bennettitales. 2 科 3. Pentoxylales. 1 科。(Mecuse の単子葉類起源説に触れず)。4. Cycadales. ソテツ目。ここに Nilssoniales をつづして加え 2 科とする。

B. Coniferopsida 針葉樹綱 1. Cordaitales. 3 科 (前川の葉類論に触れず)。2. Coniferales. 針葉樹目。9 科。3. Taxales イチイ目, 1 科 (Taxopsida の扱いをやめたのは適正と思う)。4. Ginkgoales イチヨウ目 1 科 (抄録者は Syllabus で Cycadopsida にこれが入っていたのは卓見と思っているが、著者は Florin につられてここへ入れてしまったのは恐らく改悪の部であろう)。

C. Gnetopsida グネツム綱. Gnetales グネツム目 3 科, 従前通り、終りにこの頃裸子植物の二元説が勢があるのに対して、Beck の Progymnospermopsida を持ち出し

て遂一評論を加えた上で、裸子植物は一元ならんと結んでいる。(前川文夫)

○久内氏のマグラホトトギスについて (武田久吉) Hisayoshi TAKEDA: On *Tricyrtis hirta* Hook. forma *atropurpurea* Hisauchi.

本誌 41: 10 に発表されたホトトギスの 1 品は、突然変異によって生じたものである。それが習志野の一角に在る二宮神社の裏山に、多数生えているらしいが、普通品と混生しているのやら、そういうものだけが生じているのやら、簡単な記事から推定するのは難い。私の庭にも左様なものがあって、古くは戦前に、沢山ある普通品のあるものが、突然そんな花をつけたが、他の種類との天然交配とも思えず、只珍しい品種として扱っていた。それが戦事中いつとはなしに失滅してしまって、惜しい事をしたと話していたところ、戦後またも自然に現れて、今では年年その様な花をつける。花によってこの黒紫斑の程度は区々で、中には黒紫斑の間に、普通の淡紫点を交えるものもあり、柱頭は概して普通品のものと大差ないのが通例のようで、その程度は一定していないようである。これで見ると、久内氏のは、極端な黒紫斑の性質が現われて居るものであろう。今年もホトトギスの季節には、沢山のこの品種について、黒紫斑の程度を観察して見ようと、楽しみにしている。

○オタクミツツジ (山崎 敬) Takasi YAMAZAKI: A new form of *Rhododendron indium*.

寺崎留吉氏の続日本植物園図譜 2642 図 (1938) にヤクシマサツキ、屋久島より移植栽培として、荒川一郎氏の栽培品にもとづいて画かれた図がある。将来不明の植物となってしまう恐れがあるので、わかっていることを記録しておく。現在園芸品にオタクミツツジとよんで、ごく一部の人に栽培されているものがあり、寺崎氏の図はこれと一致



Rhododendron indicum f. *otakumu* ×2/3.

する。葉は暗緑色で細くて短く、花弁はこい朱赤色で、基部まで 5 片にさけ、開花後じきに各片ばらばらに落ちる。おしべは 5 本あるが発育不良で、花糸は短くてねじれており、めしべも発育不全で結実しない。サッキの一品であることは明らかであるが、いちじるしく奇形の植物である。これがどうしてオタクミツツジとかヤクシマサツキとかいわれるかというと、次のようないわれがある。荒川一郎氏は現在東京山草会会長と